夏花少女

97
343

97—343

帝國圖書館藏

夏花少女

前田林外著

前田儀作

帝國圖書館藏

此の著か
亡き　ち丶君
たてまつる　助ぎみに

此の「夏花少女」に蒐めし詩稿の多くは、曾て「白百合」外二三の雑誌にかゝげし什なり。就中散文詩「アメリカ彦造の墓」の如きは、その最もふるき什なり。されど我が詩か小冊子ながら、詩集として世に出すは之れなもて始めとす。素より野調のことにしあれば、之れを世に出せばとて、敢て大方の覽を汚さんとにはあらず。今、非才勤苦、遠く詩の道を進まんと欲するに際し、こは我が發程のしるしばかりに刊せるなり。

表紙繪并に挿繪等は、和田繪伯がわれに行色を添へよとて、れもごろに繪きて贈られもしの「菊」に繪みて繪伯があつきなさけを謝す。

明治三十八年二月十七日　著者しるす

和田英作畫

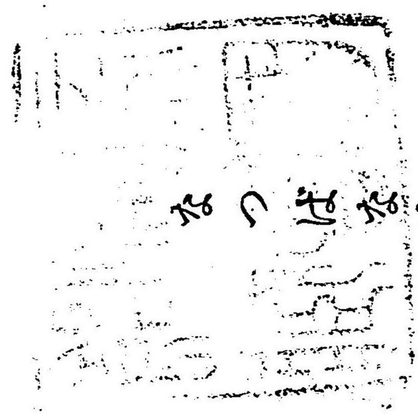
夏花少女……袋紙
夢の花……表紙
法皷
（源九郎義經）……口畫
なつばなをとめ
一、黄金の扉……挿畫
三、魔怨……仝
七、沙雲雀……仝

目次

なつばなをとめ
一、黄金の扉……二
二、尼少女……四
三、魔怨……六
四、孔雀石……八
五、妖魔の泉……一〇
六、黄金薔薇……一二
七、沙雲雀……一四
八、妖女……一六

九、魔障……一八
十、海燕……二〇
十一、誰となく問ひろ……二二
十二、夏の夜の夢……二四
金翅鳥王の歌……二七
（天上の花祭を叙べたる）
アメリカ彦造の墓……三七
翡翠折れ……五七
（源九郎義經の初戦を咏ずたる）
夢のほのほ……六七
法皷……七一
（源九郎義經の初陣を咏ずたる）

極樂鳥の賦……八九
腰越驛……九七
（源九郎義經の憤怨を咏ずたる）
白鷗に……一一九
壁書孔雀の賦……一二三



（縮 11 十）　ゆうせんせいきの会

一

黄金の扉

ささやく、『詩ぞなき汝はひとり
夏安居希望むもなど叶ふべき、
拔蹠の階とく下り去れ』。と
おのづと黄金の扉は閉ぢぬ。

『ああ、こは悲し』。と扉に靠れ
瘦するを厭はて、『佳き句もあれ』。と、
八ちたび咀嚼みては、苦吟しぬるに
『かざせ』。と眞白の千葉蓮華。
一ともと左手に一ともと右手に
またもや、一ともと眞面にくだり。
ああ、又、ささやく、『思ひ出惱
汝が爲め、ひらかん、靈妙の扉』。
何等の靈境、下界の熱を
嘆く子、歌うて、ここにぞ來れ。

二

尼少女

いづれと決めて面影うつし
我が世の生命と君をば讃てん。
聲なき宿鳥の御衣こそ着け
ふしめにかこちぬ、可憐の姿か。

さらずば、艱苦か、乳房眞白の
小胸ぞ貫く、十束劍太刀。
さらずば、御手伸べ、御袖ぞひろげ
罪の子庇ひぬ、涙の慈悲。
否、否、榮光ある天女と描き
一と枝添へんか、美ましし白百合。
さはあれ、燃ゆるは理想か、戀か
見よ、この畫筆の火焰やいかに。
われ、又描かて、聖の丘より
少女の精舍を瞰つつ老いんか。

三

寃怨

夏の夜、闌けぬる、闌けてぞあるに
ささやぐ、我には、耳をばかさで、
いつまで、瑠璃灯きらとかかげ
枯れにし聖經に生命ぞ委ぬ。

樂慾、嘲笑の世は幻しぞ
御寺に美少を。いと、いと、をしき。
かさねて、呪文、口にな誦しぞ
ああ、又印相手になる結びぞ。
さらばよ、つながぬ魂靈にしあれば
誘ひのまに〳〵、つきせぬ愛に。
見よ、こと、星映え、かつ、百合花こぼる
「叩かばひらかん」。君よ忍び來。

今宵を靈窓に、手をば把らずば
君とし、秘戀、いつは語らん。

四

孔雀石

億劫、腹の底なる洞に
こもれる怪しの蝦蟇の姿と、
さながら似たりき、汝孔雀石
變化か、魔性か、我夢みるか。

『そも、いつ逐はれし、神の座近う
燦爛く彩羽の聖なる鳥の、
いつ又、墮ちしや、若葉寶樹
下にぞ集ひて天使の守護るに、
夜天を蠱惑の星と逃しや
何にゆゑ、期くまて、ああ、汝は「流轉」。
さもあれ、白百合かざして歌ふ
朧たきかの姫、天國に泣かん』。

此の時、黙頭石ぞ低語く
『あはれは秘戀、つらきは嫉妬』。

五

妖魔の泉

譬へば紆曲れる蚺蛇の如く
紫葳は苦提樹降り、
倦んじて眠れる我が耳を舐めて
『哀』とささやき、艶女と化りつ。

ああ、又、ささやく、『妙塔巡り
禮讃、涅槃の秘路訪ふや。
仆れて熱土に死せんは頑陋
とこしへ、青綠ゞ濃きこの蔭に、
魂靈をば若やぐ、水瑠璃柳べ
ああ、そは快樂ぞ、情よ、君』。と
目醒めば、緋色の大なる龍は
薬の間を流れを燃えつつ匂ふ。
『感謝す、戯よ、戯にも渦く
妖魔の泉にわれ溺れんか』。

六

黄金薔薇

詩の料さぐると熱土、絶海
さまよふ君こそ哀としのぶ、
思慕の翼よ、ああ、など萎えぬ
掲ぐも憚げ、ゆらめけ、帳。

窓には眞近う黄金薔薇咲き
嫩枝えりては媚蝶來寄る。
美き香、白昼を熾盛と濃り
歡樂、見よ、今、夢は濃。
いつ、いつ、炫う、君し歸へりて
胸なる煥惱の浪たえぬべき、
嚥むは君吟歌、掻くは我琴
とこしへ花園愛をぞ誇る。
ああ、この暖風絶海よりか
あやしや、わが琴絃みな緩む。

七

沙雲雀

浴びては黑髮ながきを乾すと
珊瑚の沙洲に柔婉ういねつつ、
ささやく、『聖光明、樂土に似るに
ああ、又、何處へ攀ぢゆく、雲雀』。

攀ぢゆく雲雀は感ずる氣色
『艶女よ、わが巢は潮の香、花藥、
そこにはさながら雄雌彩羽の
麗なる我が夫と起き伏し馴れぬ。
さはあれ、我が夫は天の階
きのふを獨』。とふたたび三度、
瞑想を斑紋の調に歌ひ
『われまた、彩雲、さらばよ、艶女』。
艶女はああ又、夢にささやく
『われ亦汝が唄歌うて攀ぢん』。

八

妖女

『女の龍たちまち菩薩と化りて
蓮華に坐しぬる奇瑞は聞けど、
磯なる船子が戀にわづらひ
痩するとかこつは諒しからず』。

『ああ、そは、詩客、御詞粗し
やがては小舟の行く方に驗せ。
碧淵、樓閣の瑠璃おばしまに
見よ、あれ、形艶、微笑み凭るを。
滿ち干る潮間にたゆまず唄ふ
ふな歌愛づるもかの姫ひとり。
八とせを生命とただ憧れて
今、なほ、この躬は娶らずてあり。』

『あやし』。と自ら妙偈を誦せば
樓閣は、妖女は、見にずなりぬる。

九

魔障

ああ、又、魅ふは何等の魔障
厨に快樂を失ひ泣くに。
瓔珞、翡翠と覩粧凝らし
嬌眄笑みたる優立姿。

誘ひぬ。『霖雨を敗屋にひとり
寂しと詩も無う手枕まくか。
晩餐に撥かばや、絲白銀を
金盃、戀をも、君よ、歌へ』。と。
我若し勇者の大願あらば
忍力、熾盛に戒は持せんに、
動じて戯れ耗けて縋り
『甘し』。と叫べば蜚のまぼろし。
艶魔は伴狂けて紅き蛇となり
窓の戸、苔の葉蔭に睡る。

海燕

あるひは磯濱、はた沙堤
あるひは小島の巖より巖へ。
あゝ、未だ聞きを夢みごとちに
汝をば尋ねて我又ひとり。

今こそ知るらめ、海燕
頸の白妙、嫉妬の種と、
思へば柔髪の艶、涓滴も
それはた怨みの、呪詛の種と。
歡樂、束の間、生こそ變れ
眞洞に寢ぬるは紀念の魂か。
見よ、はや、臙脂溶く雲の流れて
曙、番紅花匂ひぞ靡く。

飛べ、飛べ、歌うて、妖きて飛べ
なつかし、我が妹海燕。

十一

誰となく問ひそ

少女はささやく、いとも幽かに
『かがやく夕星君は浴びつつ、
沙川滑びたる淨き牧場に
ああ、また、寢ぬぬか、ただやすらかに』。

『わびしき丘なる石一と片の
我が墓哀とけふも弔ひ來つ、
夢かは匂へる罌粟の花束
うけよと手向けて、いつしか涙。
げにはた、君こそ優う見ゆれ
燃えぬる面わは愛の御姿。
ましてや、冷たき我が魂靈、我が血
情の紅きに吸、まりぬる。』

『目覺めな、君、又、誰となく問ひそ
眠れる程にはくちつけ。』とこそ。

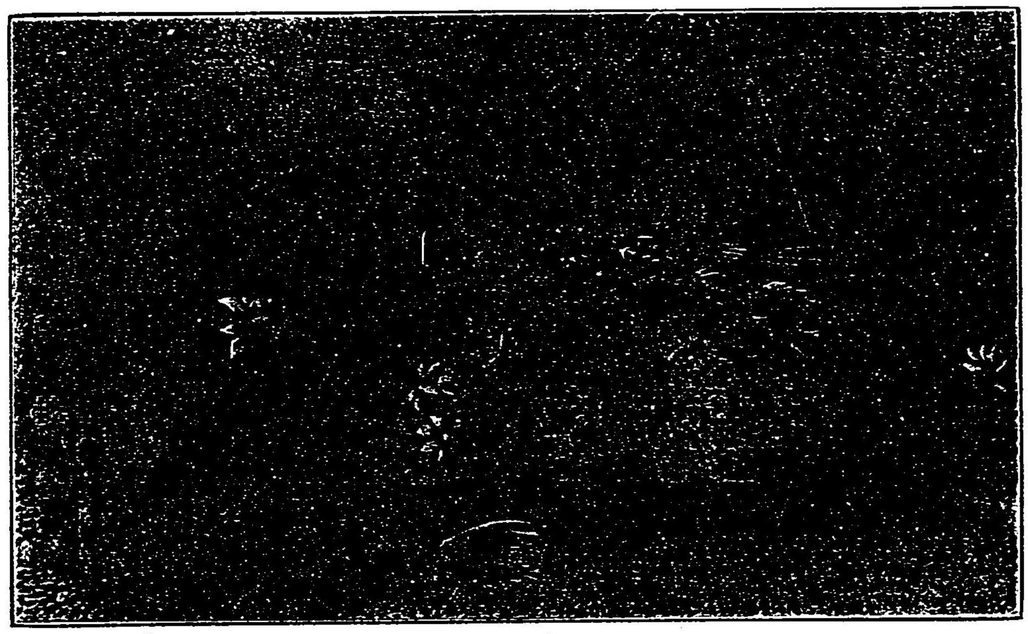
十二

夏の夜の夢

紅點ずるかの蛇いちご
『可憐』。と摘みとり接吻すれば、
さながら熱にぞ觸れぬる蠟と
あやしや、我が軀は忽ち熔けつ。

その時、我が魂靈、あゝ、又、墮ちて
夏草繁茂れる築竅暗う、
「いつ世にかへる」。と泣きつつ居るに
『悔ゆな』。と錦の小蛇は寄り來、
青き火燭しつゝいとしと相見
我れをば再び少年と化して、
『ああ、君、永遠こゝに契れ』。と
その軀もみる〳〵艶なる少女。

願ふは、秘戀、花氈に繡へよ
箔もて題せん、「夏の夜の夢」。



金翅鳥王の歌

（天上の花祭を叙べたる）

夢は怪しや、燦爛と
長さ、八尋にあまりたる
翅、金色の鳥の王。
我を脅にうち戦せて、
雲は血色の朝ぼらけ
あるかなきかの軟風に、

諸羽ふくらめ緩やかに
天の瑠璃階翔るとき、
君は多慢の憍人
軈て自在は得るべしと。

その私語ぎや、朱の嘴
觸るるに我は驚きて、
碧の樹蔭を眺むれば、
是は面白ろや、天女が
花の冠いただきて

早百合、姫百合かざしつゝ、
稚兒若交り、金銀の
砂の上を、白玉や、
紅玉緣の裾ひきて
そぞろに遊ぶ、神聖よ。

ひとり唄へば又ふたり
ふたり唄へば又みたり、
よつら、むつらの歌班が
花降る影をつぎつぎて

摩尼を瑪瑙を鏤りばめし
寶塔遶り、且つ唄ふ、
聖の讃歌や、おのづから
天には天の樂ありて、
柔婉に響く妙音に
いといと愛もこもるめり。

かかる華麗と歡樂を
視るは今ころ始めなれ。
住みて見ましき雌垢土ぞと

心の底に感じつつ、
鳥の脊をすべり下り
仍もその體覗へば、
靈酒匂ふ彩瓶や
金の杯、眞白手に
採りては酌みつ、瀧ぎてはは
祭壇淨む、泊滴よ。

その祭壇の御前にて
玉の袖振る花祭。

いてて迎ふる天使が
艶を誇りぬ天女に、
夢の花束、夢のごと
「美」とぞ呼びつつ擁てば、
これも「眞」とぞ嘯へつつ
うつつや、花環うち返し、
てこに戯咲とこに戀
光明も永劫の天の國。
嘗て昆耶婆は殿しう

聖經に演べて曰ひけらく。
三十二天、星の上の
虛空は歡喜の聖天とて、
天男、天女魂靈合せ
天華受授しつ、樂むと。
それにぞ似たる靈境か
鞭策は纓絡、羈絆は眞珠。
無量の性も「善」無上
神は神をぞ生るるなる。

我、下の界を眸れば
荒れし沙漠に闘ぎつつ、
そこに暫時の平和と
そこに僅少の光榮もとむ。
思へば、我も久遠劫
輪廻、幾層苦を經しや。
あゝ、天翔る靈鳥よ、
われと等き人の子に、
汝が靈妙の翅もて
天の快樂は得せしめよ。

なほ念じつつ、枝は枝
葉は葉と向ふ瑞木々の
隙間にニンフの笑ふごと
小音、流るる川に沿り
是れ水晶と手に掬び
口をも漱め伏し拜み、
こゝに美興の花祭
視るを冥加と讃ゆれば、
夢は怪しや金色の

鳥も鳥とし幸福讃ゆかな。

アメリカ彦造の墓

一

白楊疎に、
星まれに、
寂しき野邊の曉。
荊棘露みちて

百合の香寒く、
小さき石の佛
慈眼、われを迎ふ。

聞く、君が三尺の塚
とどめてこの野にありと、
ああ、いくたびか君が塚尋ねて
ここにさまよふ我。

ああ我、この荒涼に描へず

我、この頽敗に泣きて、
慘然として涙を枯骨に濺ぎ
痛憤してこの詩を吟ず。

二

ああ、アメリカ彦造、
ああ、天の撰民彦造。
曾て遠く祖國を逃れて
一劍飄零の奇兒。

蒼茫たる太西洋のあなた
桑港の市に立ちし君。

適ま義俠の提督ペルリに知られて
欣然として告げて云ふ。
わが祖國は亞細亞の絶東、
豆の如き小さき嶋國、
いにしへの美名は蜻蛉洲。
別に豊葦原瑞穂國とただへて

米、漆、茶、糸に富めり。
國の風俗特に美なれど
未だ文明の體を知らず。
世を擧げて桃源の夢
昏々として醉へり。

提督、君が語をきき
天を仰いて高く歎ずらく。
ああ、かくの如きか島國の美
これ神の賜へる寶藏、

とこしへに鍵加へずば
必らず國に禍あらむ。
ああ、誰か疾くこを開くもの。

直ちに君を政府に薦めて
紀元一千八百五十三年、
提督の大艦君を載せつ。
涙、長閑なる春の曙
錨の浮標を跡にのこして
この絶東に航しぬ。

三

ああ壯なるかなこの行
祝砲、王者を送るごとく、
一千の水兵、
四艘の軍艦、
生死、存亡、共に君が導くまま
昨日を追憶へば
君に無限の感なからむや、

身を一葉の船に托して
餓ゑし子明日の命はからず。
或は逆まく荒波の
突として來り、突として去り、
赤裸々の躰舟もろとも
碎けよとこそ殿のうへ。

今、啞然として波を蹴り
悠然として雲に入る。
ああ壯なるかな、この行

意氣天を冲するに
風濤も何の苦ぞ。

君、或は提督と甲板の上、
打語りつつ相立てり。
微笑みて指していふ。
如何に歐羅巴の強國を見よ、
自ら文明の國といへど
みな義俠なきの國、
その美しき名の下に

きたなき業する國。

かれ黄金嶋、
これ珊瑚嶋。
天、提督が手に唾して
寶多き嶋國を探るにまかす
しかも又きたなき業か。

提督笑つていふ。
開國のほかに心なき我、

君さな深く疑ひそ。
見よ、わが阿米利加十三州
よく正義を以て英國を挫きぬ。
義俠の父、なり、
文明の母、なり。

四

艦、阿米利加を出て幾日
阿弗利加に泊する一夜。

しば〳〵歐羅巴の港によりて
羅馬、希臘の國をも過ぎり、
慨然としてその遺風を見、
高き高き理想を
沈默三千年の日本に抱く。

ただ愁ふ印度日既に落ちて
暗雨緬甸にかゝる、
況んや、支那の子阿片の毒に酔ひて
四百餘州の空暗憺たり。

叫、文明の慰籍を受くるは誰
文明の迫害を受くるは誰。
ああ、ヴィクトリア女王のいただく
燦爛の冠、
綠の玉は印度の貢、
紅の玉は緬甸の貢。

ああ、君ゆく〳〵他の國に
いくたびか袖をしぼり、

彼を思ひつ、此を思ひつ、
始めて祖國の行末に迷ひぬ。

五

相模灘三十餘里、
雲白うして綠の波溶々たり。
嘉永六年六月一日
空、風もなき朝。
笛高く鳴り

烟長くなびきて、
美なる富士の影を拜しつゝ
あゝ、君が大艦は
進みて錨を久里濱におろしぬ。

城のごときは軍艦、
ひるがへるは愛の旗。
百雷一時に降るは大砲。
奇しきもの遠くより來る
いざ起きよ、眠れる祖國。

いざ〳〵聲を揚げよ
ああ、沈默三千年の日本。

さはいへ、遠く走りて
君、ここに國禁を犯せし身、
罪、但ふべくば當に死あるのみ。
目を擧げて山河を見るも
足、祖國の土を踏むべからず。
父あり母あり、
頭に白き死の花咲きて、

墓に入るべき齡ぞ、
ああ、この日を舷によりて君
袖を掩うて泣きしやあらずや。

六

ああ、塚のぬしよ、
微笑して我が詩を享くべきか、
四たび祖國に來つて入れらず
しかも祖國を慚かせし者は誰ぞ。

數奇の君、
落魄の君、
人、ペルリの名を記するも
誰か君が功業を知らむ。

ああ、塚のぬしよ、
更に五十年後の日本を思へ。
君、人道の大義を期して
ここに僞善の學風行はれ。
君、文明の精髓を期して

ここに皮想の文明入れり。
ああ、われ涙ながる
終に君が當年の理想を如何。

ああ、先人の功を沒して
人、虛榮に跨るの世。
他年、本郷の陋屋に窮死して
一言を自らの爲に辯せず。
ああ、高いかな君
能く天命を樂めり。

ああ、アメリカ彦造、
ああ、天の撰民彦造。
われ、君が塚を尋ねて
終に君が塚に逢はず。
野は無名の卒都婆朽ちて
ただ草花の亂れ咲くを見る。

翡翠折れ

（源九郎義經の初戀を叙したる）

これ靈郷か、いと柔さ、
管絃の樂に妖艶の
彌生の空を夢のごと
魂も漂ふ心地して、
枸杞の姫龍綠なる
とさまに立つや、御曹子。

耳を澄ませば、その調、
七情、十六聲縺れ、
熱き情や、色、姿
秘めてぞ歌ふ吟歌ながら、
雲と飜りて波と打つ
戀ひつ、狂ひつ、悶えつつ。

『ああ、面白の琵琶よ、琴よ、
さてはゆかしき吟歌の譜よ、

思へば、我は花落にて
しば〳〵、あまた、聽きしかど、
かくも多恨の吟歌にして
かくも趣味ある樂ならず』。、

『さいへ、かほどの管絃にも
笛のなきこそ怪しけれ、
笛はあれども奏者なく
奏者あれども笛なきか、
笛は、奏者は、ありけれど

吹かぬ習慣か、東路は』。

『親より親へ吹き傳ふる
笛は自ら合さん』と
翡翠折れの名笛を
玉の袖よりとり出だし、
そのとこ紅の唇に、
濡る歌口濕すかな。

『あはれ、この笛この律に

我が亡き父よ、靈入れて
わけて精妙なる節節を
幽界よりは傳へよ』と、
吹くに、彩ある風鳥の
その鳴く音にも優りたる。

ああ、血ぞ燃ゆる若き子が、
その歡樂は樂にこそ、
樂の生命は詩にこそ、
詩の生命は戀にこそ、

『今、如何なれば、琴は、琵琶は
ゆかしき吟歌は、歌みにしか』。

雲、紅に夕映えて、
春の薔は苑に満つ、
國司の守の愁ふてふ
光明炫ゆき高殿の
碧の瓦に彫りにたる
華も妙香を吐くがごと。

孔雀燿き金鷄の
閃めく壁畫背にして、
笛の音色に打たれつつ
夢みるごとく欄干に、
凭るは、國司の少女かや
姿は精か、夕づつの。

瞳、其の名の瑠璃に似て、
淨く、涼く、麗はしく、
背に流るる黒髪は

紫紺の波と揺ぐなり、
星やかざせる百合花やもつ
その優さ指は匂ふめり。

豊麗に咲める芍薬も
羞ぢて嬲びてうなづきつ、
薄紫の接骨木と
躑躅濃紅の花蔭を、
白き翅に飛ぶ鳩も
その囲き胸亂すらし。

『あはれ、小さき優さ鳩よ、
八幡の使の白鳩よ、
切なる戀を吹く笛の
少女が胸に響く間は、
花な啄ばみそ、汝もまた
神に祈禱を捧げ來よ』。

『ああ、我いつか世に出てなん、
さあれ、天地双びなき

理想の戀を遂げざらば
光榮も慰籍もなからん』と、
湧き出づる思ひこめて吹けば
笛は頒ひぬ、憧れて。

夢のほのほ

飛ばせよ、雲と、しば靡れど
銀色の裏は見せず。
橄欖しげるこの森にし
行くて失ひ、旅ぞ嘆く。

ああ、止むなくば、蛇に打たれ
うたてや、とはを開に泣かん。

照らせよ、星と、また叫べど
星は照らず、雲も黒く。

ふと眼に映る、姿や何に
それぞ、二人の天つ童。
不盡の神火、さては鬼火
黙せる燭は焔奇しき。

右、わらべの捧げぬるに
焔のはしら、立ちて騰る。

焔の色は、紅き真珠
焔のなかに、妙華の宮殿。

『暗き夜、誰れか、汝や照らし
かの樂土には至りぞ得る。
懺悔にくるる、そのをりく
われは「掌善」、夢と見ざれ』。

左、わらべの捧げぬるに
焔のはしら、裂けて散りぬ。

焔の色は、青き真珠
焔のなかに、妖魔の洞窟。

『暗き夜、誰れか、汝や照らし
かの奈落には至りぞ得る。
迷惑にくるる、そのをり〳〵
われは「掌惑」、夢と見ざれ』。

法皷

（源九郎義經の初陣を祝ぐたる）

一

金碧燦たる鳳凰堂の
蒔繪の須彌壇、聖佛近く、
靈香薫じて花ふる蔭に
あれ見よ、銀臺皷を据ゑたり。

『知らずや、新發意、名のある鯨鐘は
撞かねど響くと聖經に說くに、
音なし皷と假言つべけんや
いていて驗さん、我には貸せよ』。
新發意十二の年紀は超ゆれど
鈍色法衣の姿も可憐。
『あらずよ、將軍魂亡くば
白狐の皮は破れてあるも、
よし又締緒は紅燃ゆるも

それには必らず佳き音を宿さじ、
況んや、こはこれ「神秘」の皷
調ぶる伶人今はたありや。
傳へぬ、平治にかの六波羅の
戰鬪了りて源家は悲運、
哀ぞ、奥州六郎義隆
劒を龍華の雪に撑ぎつつ、
我等は西又花洛に入りて
いつかは怨みの念を晴らす、

味方や、來れと皷を打てば
來るは毒羽箭、頸を射たり。

義朝、皷を紀念にうけて
流石に、暫しを目を瞑ぢ嘆く、
悲しや、尊き八幡殿の
遺躰もここに今ぞ失せぬる、
思へば、皷よ、汝を打つごとに
汝がごと我が生命も縮まりゆくか、
さはいへ、勝負は合戰の常ぞ

東國は故郷いざ鞭あげん。

下れば、大なる海洋にも似たる
琵琶湖は暴風に波瀾立ち凄ぶ、
岸の邊、枯葦さし分け出でて
小舟は搖らげど水底深う、
遺愛の皷は首は沈め
ゆく〳〵義朝顧みすれば、
殘照を浴びたる堅田の浦曲
墳墓は泡沫、痛むに堪へんや。

この夜を、龍女が湖の宮居に
語るは青虹に容貌を變へて、
湖水の末流なる宇治の靈地へ
波を守護せば任務は足らん、
星巖、龍巖、獅子形の巖
峨峨たる絶壁縫ひつつ流るる、
大河はとこしへ白蛸の領ぞ
翼ある金艇飛して降れ。

曉、漁翁山門叩き
昨夜は網して寶珠を得たり、
妖怪棲むてふかの橘の
小島が崎なる洞窟を見よと、
長老俄に夢覺かし
現に應へて堤を下りつ
闇洞、探れば寶珠はなくて
靈妙と見るまで輝く波。

何等の歡喜、菩薩に謝せよ
稀有なる奇瑞や、「法皷」と呼ばん。
僧侶、緋法衣、錦襴の袈裟
秘めたる技倆を今こそ知れと、
とり〳〵取上げとり〳〵打つに
不思議や、皷は音をば出ださず、
之より龜に納むと傳ふ、
願ふは、將軍御手をな觸れそ。』

『善い哉、新發意、汝が聞くところ

平治はこの軀の生れける年、
且つまた皷と緣は深し
抱きて疾く〳〵ここにぞ來れ。
あれ聽け、我が兵二萬五千騎
伺只擾擾、どよめき騷ぐ、
鏡を粹けば少女は泣くに
軍紀の亂れを男兒や耻ぢざる。

二

将軍義經、皷を把るや
直に矢櫻の上にあらはる、
緋威の鎧、黄金の兜、
齢は幾歳ぞ二十五の春、
東の嶺をば振りて出づる
炫ゆき旭紅に耀きわたり、
眉目にぞ溢るるその神彩は

似たりな、神将、威ありて猛き。
眥決して遠く望めば
湖、縹渺として雲と藹、
蜿蜒、春山伏しては起ちつ
伊吹は濃霞、比良は斑雪、
何處ぞ内海か、怨を呑みて
我父幽冥なる悪趣に墮ちし、
祖父の義隆がおくつきこそは
はかなや、彼處の漁村なんか。

この地は即ち伯翁頼政が義しき聲をば始めて叫び、高倉のおん宮上に頂き多怨の大敵防ぎし處、軍は敗れて、埋木の歌

詠つつ悲哀によし果てぬれど、云はじな、數奇の老いし歌人と類なき壯圖、讃嘆すべし。

【禮拜、欽みまた若しんて我今、皇天の威靈にぞ詰ぐ、

昔ては凶暴平氏を忌みしかちかごろ義仲無下に変代りて、

暑髪が花束分つ如くに天下を三つにと志しては、

荒慌さながら、王城惱ましく窃に西なる平氏と結ぶ。

厥罪問へよの宣旨をかしてみ

鎌倉出でては夜を日を馳せつ、
範頼瀬多より我は宇治より
渠をば挟んで撃たんとすなり。
ああ、天神地祇請ねがはくは
この戦闘をもて若し吉とせば、
維この默せる皷は鳴りて
衆をぞ励ませ、この河渡せ。

いていざ打たんか、汝皷よ
第一の聲は義隆に回向、

第二は頼政、第三は父の
怨霊、悪霊、菩提に供養『。
不思議や、皷は忽ち炊々く
琥珀の玉をば打ち出すごとく、
或は魔王の血潮に飢ゑて
真夜半、暗きに舌打つごとし。

軍兵、等しく耳聳てて
今ぞと刹那に靜まりぬるに、
一韻一音いよ〳〵切に

序、破、急いづれか悲憤ならざる、
『これ遊戯ならんや、聲譽の初陣
源家の浮沈はこの一舉ぞ、
危險は冒せ、艱苦は凌げ
汝等勇士の名をば汚すな。

さはいへ、北岸敵を眺めて
逡巡、渉らず怯とや云はん、
我聞く、平氏は山又海に
假寢の夢をば僅に結ぶと、

やがては討たんに、その懸量、
逆捲く怒濤を汝等如何に、
されば、今日より「自然」を敵とし
風とも爭へ、波とも闘げ。

ああ、この宇治川、躍つて先陣
誰かは此の日の勇者と驕る。』
將軍、雄たけび終らぬ程に
小島が崎より二騎躍り出づ。
何等の不思議ぞ、紫電閃く

晴れたる蒼空に雲馳せ驟り、
殷々、鳴動く雷火のしたに
皷はちのづと又響きけり。

極樂鳥の賦

一

ああ、絶南の聖嶋や
寶相樹繁茂れる深林の
なかに栖みたる極樂鳥、
あした、旭紅の影を見て
ゆうべ、殘曛の影を見て、

水銀懸る長き尾を
右と左に擴げつつ
林離れて翔る時、
別に垂れたる幾線の
玉蟲色の織き尾は、
黄金そばだつ冠毛と
日に燿きて、燦きて
あたり何等の炫ゆさぞ。
ああ、人の子は寂び果てて
容姿誇るに何ありや、

鳥の驕樂請ふ見よと
扇の如く翼延べ、
ほがらに美なる音色して
賓相樹の枝に繰り返し
囀ずる歌曲の面白ろさ。

二

我、熱き日の日盛りを
薫る夏花分け來り、

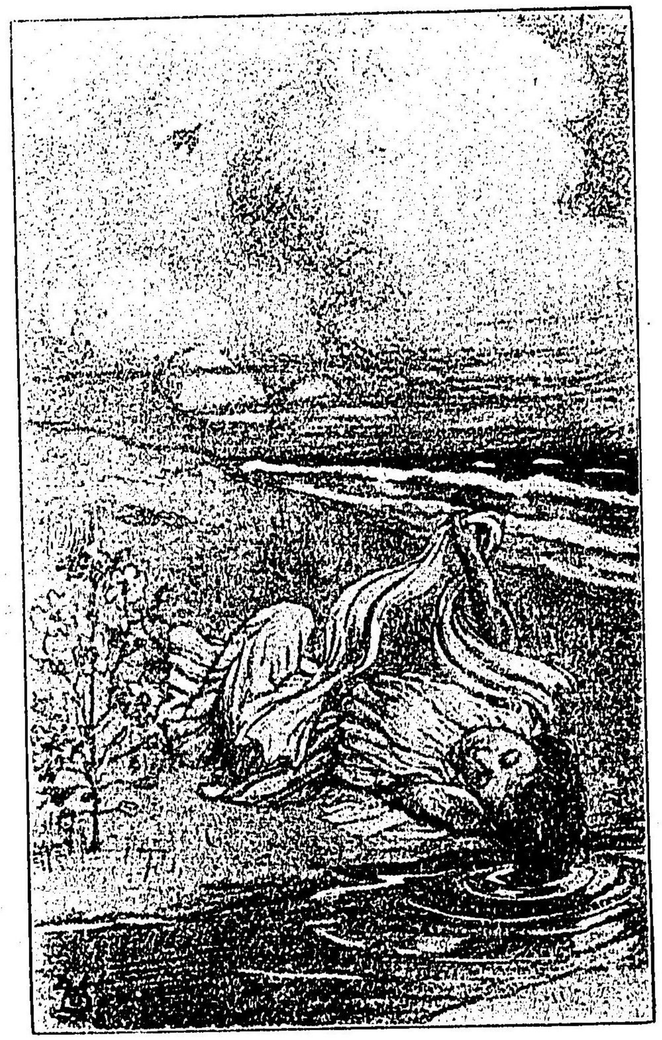
故郷苞に奇しき物
一とつは獲んと佇立むに、
たま〳〵鳥は豁に下り
雌雄、尾を振り羽を振りて
聖き遊びに戯むる。
やがて泉に浴しては
ミューズの神が覩粧に、
その御意を凝すごと
翠淨むるていたらく。
我、戯影に身を寄せて

銃身は定めて狙ひしも、
餘り容姿の神聖さに
心惑うて機を逸し
火蓋は切らで止みにけり。
ああ、美と慾と驕樂を
罪あるものと否む世に
汝、尊き極樂鳥
何等奢侈を極むるや。

三

ああ、慣習に拘泥らひ
奢侈は此の社會を滅すと、
眼小さき博士らは
智慧あり顔に罵りて、
愛たてや、婆微と凋落の
悲境に人を置かんとす。
見よ、文明も道德も

さては理想も藝術も、
聖き慾より進み初め
はた高まりて新たまる、
奢侈は美の門を開く鍵。
ああ、紅花一つ點ぜざる
沙漠に似ずや人どころ、
斯くて教化も益は無う
政治も終に何かせん。
感謝す、鳥よ、天降して
寂びぬる世にも汝こそ



神の遣せる騎樂をば
受けよと翼打ちひろげ
炫き證明を獨り顯示すか。

腰越驛

（源九郎義經の憤怨を呀ドたる）

一

沙雲雀鳴き蜥蜴這ふ
ここ腰越の磯回より、
海面見れば日は燃えて
捲きて來りて岸を打つ、

波瀾は銀紗を搖るがごと。

近く、潮に脛洗ひ
眠る金龜は江の島や、
島の廻りに秘めにたる
遂き十二の洞窟より
奇しや、彩雲、忽ちに
見よ、泡のごと、綿のごと、
さては多寶の塔のごと
湧きぬ、靡りぬ、襲雛きぬ。

「あゝ、双び無き怪勇の
叔父鎮西八郎が
柳樹の葉蔭に弓撫てて
かの保元を忍びつつ、
暫しを獨り謫居の
八丈が島は何處ぞや。
あゝ、鳴鏑とり矧ぎつ
やごろ咖、か遠けれど、
襲ひ寄る船一と征箭に

浦鳴響して、射沈めて、
行方は決めて縹渺と
雲や踏みけん、跡ゆかし。

叔父には似ねど我も亦
唯、謫居の風情にて、
飢ゑつ、渦きつ、堪へがたき
憤怒を琵琶に漏らしつつ
こに盛夏を七、八日。

我、證明をば神に受け
まこと起請の血文もて、
已に七たび御兄に、
尚一とたびは廣元に、
『われ、今、憂愁いとふかく
悲嘆く、切なり、救へよ』と、
伏して頼めど應へ無く
勳功は凡て默せられ、

かつ、譏言は紀されず、
驕慢、勇を恃みぬと
無禮ぞ、我を呪詛ひぬる。

亂れ入りてぞ鎌倉に
身は頸刎ねて果つべきか、
または花落に打ち延びて
前途深くも議すべきか、
ああ、死すべきか、生くべきか
孰れを我は擇ぶべき。

雲よ、我が魂靈戒せて去れ
この軀情火に燒かるるにて

二

喩へば獅子が囲亂旋を
生命の限り舞はんとて、
丈に餘れる頭髪振りて
燃ゆる花野に狂ふごと、
雲は卷雲、層雲

或は亂れつ、渦卷きつ、
婉轉、玉の輾ぶごと
搖曳、絲を撥くがごと、
又は帆のごと、旗のごと
あな、磯回にゑ馳せ來たる。
更に後より急ぎつつ
意、味ありげに…と簇の、
紫の雲追ひ拔きて
來るは、黑雲、混沌と。

『起きよ、九郎よ、時は亭午
久遠劫より傳へたる
鐵の鉈汝に貸す、
惜しと思ふ痴者に、
投げよ、命中せざらんや
夢より怒れ、判官』と、
億の魔軍を破る時、
神將が令する威勢にて、
雲の黑きが聲高に

叫ぶは怪し、魔か、神か。

あはれ、義經、仰ぎ見つ、
神の御宣と感ずるや、
直に鎗を手に把りて、
『見よ、この如く痴者に、
酬ひて魂靈の苦痛をば
いざ癒せよ』。と琵琶に投げ、
とく〳〵從者を促せば
『御身惡士に入らざれ』と、

溫柔き御聲を零しつつ
見よ、紫は暈け來たり、
墨色の雲と入り亂れ、
電光、鐵火、きらめきて
いよ〳〵、鬪ふ、不思議さよ。

三

待つも詮なき使者待つと
七里が濱の濱なかば、

磯回に張れる天幕の
中にしばしを交睫みて、
今、夢醒めて、恍惚と
左右の従者に義經は。
『この軀火炎と燃えぬれば
假りに兵士を我が結ぶ
夢もさながら闇雲や、
立ちては柱崩れては
ただに滅亡の淵に落つ、
あなわなかる奇険さぞ。

されど、一とつの聖光明を
其處に幽に望みしか、
いて、琵琶により汝等に
夢の靈妙を示さん』。と、
天女が懸の聖歌をば
聲、ほがらかに誦し出でて、
琤けば大絃、百聯の
金瓔珞に觸るるごと。
小絃、青葉の匂やかに
囁くかとぞ疑はる。

翠の御衣
かかげつつ、
姿態も神聖く
艶麗に、
香、薫ずる
紫の
雲のそびらに
立ちぬるは、

我が「初戀」の
瑠璃姫か、
あるは、妖姫か、
天女かと、
今は憤怒も
忘れ果て
うたた、迷惑へる
みづからに。

『われは御身が
調べぬる
琵琶の音色の
愛でたさに、
戀ひて、天降りて
かしこなる、
山は金龜に
逗まるに。

悪しき龍にぞ
誘惑され、
御身が琵琶を
砕くべき
氣色惜みつ
急ぎ來つ、
琵琶をとり上げ
かつ見るに
砕けてあれば
打ち奏て、

その妙音に
より縋り、
やがて龍こそ
くだししか
あな、嬌嗔と
嗤はざれ、
さあれ、御兄の
二位殿へ

朦朧に繁茂る
大樹をば、
知り給はずや
仆さんと
その根噛みつつ
深穴に、
怪しの蛇ぞ
蟠まる。

さば咀詛はるる
躰こそ
御身ひとりと
思さざれ、
御身を呪詛ふ
醜の男も
遂には御兄
その兒等も、

悲命魔障は
免れじな。
あはれ、とこしへ
悲歎かるる
鎌倉山の
物凄さ。
かかる闇黒に
入らんより

黄金の細を
界にし、
さなり、光明
虚空に満つ
霊境こそは
楽しけれ。
いざ〳〵馬に
鞍おきたまへ
われも御身に
したがはん』。

白鵠に

白鵠よ、すがた神聖う
翔て來ね、貝多羅の樹に、
樹は浴びぬ、夕陽の金流
天地ぞ只美のみなる。

夢、否、幻、否

いま、うつつ、神は在します。
白鵠よ、すがた神聖う
翔けて來ね、貝多羅の樹に。

汝が聲は聳て我きき
今も尙憧憬れてあり、
限り無く、崇高き調べよ、

魄靈に深く泌みつつ。

七萬種、國語をそろへ
高聖座、よし讃ゆとも、
白鵠よ、汝が奏でなん
讃歌ばかり、神はうくべし。

樹は浴びぬ、夕陽の金流、

天地ぞ只美のみなる。
白鵠よ、すがた神聖う
翔て來ね、貝多羅の樹に。

壁畫孔雀の賦

金の沙や銀の礫
畳み敷きぬる地を踏む。
さては、いみじき光耀の
ここや靈境、いと淨ら。
炷の香氣を尙留む
玉の柱に彫りたるは、

君王の御狩や、戀語
あるは、勇士の格鬪や。

年紀は數千を隔つれど
神は藝術、藝は神。
目にぞ泌み入る精神、風俗
優婉さ、勇猛さ、活けるごと。

ことに我が生も忘らるる
華麗、歡樂あつめしは、

それよ、聖壁の孔雀鳥
ああ、この匠、名はいかに。

百、千の星の光もて
青綠したたる無憂樹の、
葉蔭に永刧を、い舞へよと
汝れが彩羽を畫きしや。

皷樂弦歌は絶えぬるに
尙も幽に韻ひつつ、

いと爛きぬ、燿きぬ
扇ひろげし、翼振りよ。

歌へ、樂しき孔雀鳥
律調、迫らず卑くからず、
不滅の戀を昔をば
など羞澁のあるべきや。

見よ、實利てふ名に迷ふ
世にこそあれば、乃し、はた

神は藝術、藝は神
ここに稱ゆる客やある。

舞へよ、樂しき孔雀鳥
汝が美はしの翼のべて、
舞へよ、「無限」の渦捲きて
ビシュナの神の舞ふごとく。

あはれ、多寶の聖殿に
神は藝術、藝は神。

三たび禮讃かさぬれば
鳥は感じてうなづきにけり。

夏花少女 畢

頁	誤	正
七	一行……戲咲……は……戲咲	
三二	七行……戲咲……は……戲咲	
三四	七行……天翔る……は……天翔る	
三八	七行……こゝにさまふ……は……こゝにさまよふ	
四〇	一行……太四洋……は……大海洋	
五九	一行……花落……は……花洛	
七〇	六行……掌恐……は……掌恐	
八一	六行……内海……は……内海	
八二	五行……瞰つつ……は……瞰しつつ	

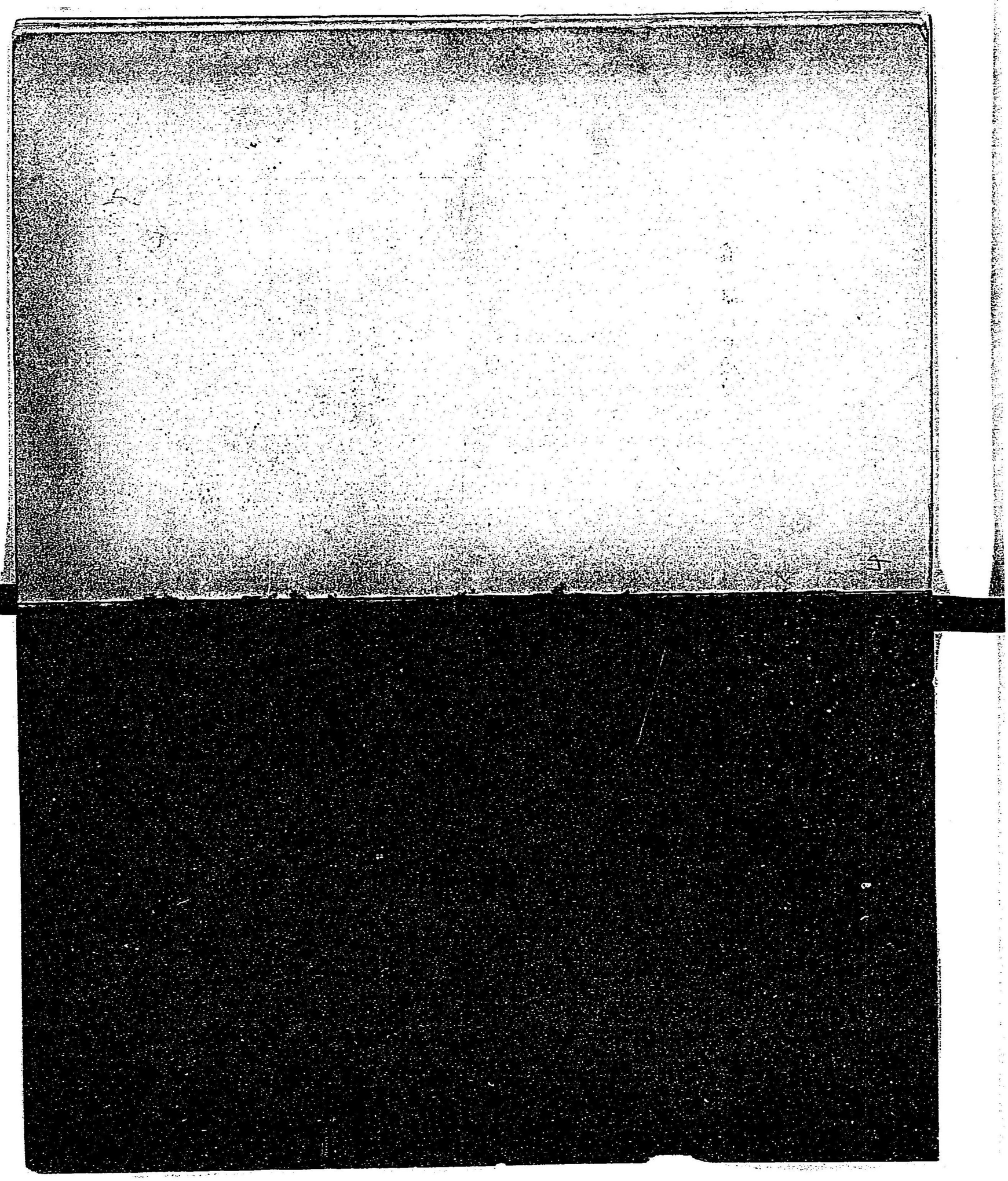
頁	誤	正
八三	二行……島天……は……島天	
八六	三行……一擧ぞ……は……一擧にう	
八七	二行……怒滯……は……怒滯	
八九	五行……なかに栖みたる……は……なかに栖ぬる	
一〇二	七行……花落……は……花洛	
一〇五	八行……神將……は……神將	
一〇六	四行……鎚……は……鎚	
一一一	二行……瑞璃姫……は……瑠璃姫	
一二一	四行……白鶴……は……白鶴	

不許複製

明治三十八年二月十七日印刷
明治三十八年三月三日發行
明治三十八年八月十五日再版

著者兼發行者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　前田儀作
印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　白土幸力
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三光堂
發行所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　東京純文社
大賣捌　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館、勉強堂、金昌堂、

定價金四拾五錢



97
3243

97
343

088067-000-5

97-343

夏花少女

前田　林外／著

M38

DBG-0164